

## 論 説

## ベトナム後期黎朝の成立

蓮 田 隆 志

## 1 後期黎朝成立史再検討の意味

ベトナム史上における16～18世紀を概観するとき、政治的分裂と南方へのベトナム人世界の拡大というふたつの大きな特徴が看取される。1527年に前期黎朝を篡奪して莫朝が成立して以降、大まかに言って16世紀中は紅河デルタ地域を中心とする莫朝と南方の清華・父安に拠る後期黎朝（本稿ではこの時期の黎朝のことを清華黎朝と呼ぶ）との対立抗争があり、後期黎朝が莫朝を中越国境の山地部へ駆逐した後の17・18世紀は、後期黎朝の実権を掌握して東京（現ハノイ）<sup>トンキン</sup>を中心とする鄭氏政権と黎朝の正朔を奉じながらも現在の中部ベトナムに本拠を置いて鄭氏と対抗する広南阮氏とによって国土が二分された。外部への拡大は、主として広南阮氏の手による南方への拡大として実現されたため、南進とも呼ばれる<sup>(1)</sup>。現在の南北に細長いベトナムの領域とその内部での北部・中部・南部という地域区分とは、このふたつの動きの最終的帰結でもある<sup>(2)</sup>。本稿は第一の特徴である政治的分裂開始期の事情を、再検討するものである。

後期黎朝の大きな特徴は、皇帝黎氏は政治的権力を失った名目上の存在にすぎず、そのもとで王号を代々世襲する鄭氏が実権を握る政治体制にある。この二元的な体制は、黎王—鄭主 *vua Lê-chúa Trịnh* あるいは黎鄭政権 *chính quyền Lê-Trịnh* などと表現される。他方、実際の権力が鄭氏に存することに着目する場合は、これを鄭氏政権 *chính quyền chúa Trịnh* と称する。時代が重なることから、ときに江戸期日本の朝幕関係にも比せられる<sup>(3)</sup>この特異な体制の成立と展開とは、次のように説明されるのが通例である。

前期黎朝は16世紀に入ると皇位継承争いや重臣間の権力闘争が激

化し、内乱状態に陥った。この中で皇帝は実権を喪失し、ついには権臣莫登庸によって篡奪されて滅亡した。1533年、前期黎朝第10代皇帝昭宗の子黎寧が哀牢の岑州（ラオスのサムヌア Sam Neua）で即位し（莊宗）、ここに後期黎朝（中興黎朝 nhà Lê Trung Hưng）が開始される。しかしながら、この時すでに政治的実権は復興の立役者阮淦が握っており、1545年に阮淦が暗殺されるとその女婿鄭検が権力を掌握した。以降、幾人かの皇帝が権力奪回を図ったが悉く失敗し、王朝滅亡まで二百年以上にわたって代々鄭氏が黎朝の最高権力者として君臨した。

この体制は、形式面においては1599年（光興22）に鄭松（鄭検の子）が王爵を得て王府を開いた時点で完成する。その直前まで阮淦の次子阮潢が有力者として奪権の機会を窺っていたことが指摘されているが [Taylor 1993: 42-65]、これは阮淦系勢力内部での権力闘争であり、権力の所在は阮淦から鄭検、そして鄭検の子孫へと阮淦系内で単線的に移動し、他の政治的勢力が権力の座に着く契機は事実上存在しなかったかのように叙述される。すなわち、後期黎朝の政治体制は成立以来基本的に変化せず、その成立事情に決定的に規定されていたと理解されてきたのである。ただし、以上の経過や事実認識は通史的著作の中で触れられることが多い。王朝の成立から鄭氏の封王まで60年以上経過しているにもかかわらず、各段階ごとに詳細な検討がなされた結果ではない。

近年の16世紀ベトナムに関する研究では、莫朝を「偽朝」と規定する王朝年代記以来の史観が相対化されて、石刻史料を活用した莫朝史の再検討が進んだ結果、ベトナムで出された近年の通史も莫朝史の再評価を明確に掲げている<sup>(4)</sup>。しかしながら、莫朝と対立した後期黎朝側が16世紀中に残した石刻は殆ど現存せず、政治史に活用しうる情報も極めて少ない。家譜史料の場合、多くは編纂・筆写がはるか後代にかかる点で弱点を抱えている。

筆者はかつて、ベトナム前近代史の根本史料にして事実上の正史たる『大越史記全書』の異本（NVH本「大越史記本紀統編」およびA4本『大越史記統編』）に文献学的検討を加え、これが後期黎朝時代の

成立にかかる公的な編纂史料でありながら、従来の定本たる正和本『大越史記全書』（1697年成立）とは異なる系統に属し、極めて高い史料的价值を有すると主張した〔蓮田2003〕<sup>(5)</sup>。A4本も同時代史料とは言いがたいが<sup>(6)</sup>、石刻や家譜と異なって通時的体系的な記述がなされており、従来の主史料である年代記（正和本や黎貴惇『大越通史』など）との対照が行いやすく、政治史に関する情報も比較的豊富という利点がある。以下、本稿はまず年代記史料の再検討を通じて後期黎朝成立の事情を明らかにする。次いで家譜を援用しつつ再興当初の陣容を再構成し、最後にこの時期の政権構造の特質を明らかにする。時代的には鄭検が阮淦の後継者として黎朝の指導者となる1545年以前を扱う。これによって単に後期黎朝の成立史が再構成されるのみならず、鄭氏政権成立の前提条件も再検討に付されることになる。

なお、1533年に後期黎朝が成立すると、年号も莫黎兩朝のものが並立することになる。本稿で扱う史料は莫朝を偽朝とする立場のものばかりだが、そのような史料のバイアスを避け、また煩瑣となることを避けるため、本文では西暦（その年の大部分が対応する年を機械的に当てはめる）を基本的に用いる。

## 2 清華での黎朝復興と阮淦

後期黎朝初代皇帝莊宗（在位1533-48）を擁立した主体については、その後の状況を引きずってか阮淦とされることが多い<sup>(7)</sup>。その根拠は次の史料であろう。

【史料1】正和本『大越史記全書』<sup>(8)</sup>（以下、正和本）卷15，壬辰莫・大正3年（1532）年12月条（校合本p.841）<sup>(9)</sup>

12月，黎朝旧臣の安清侯阮淦は昭宗の子寧を哀牢に擁立した。初め，阮淦は哀牢にあつて兵を養い武器を蓄える一方で，人を遣わして国中に黎氏の子孫を搜索させたところ，昭宗の子である黎寧を探し出すことに成功し，彼を擁立して帝位につけ，元和と改元し〔これが莊宗である〕，これによって国主の系統を正しいものにした。これを聞きつけて（清華・父安など）西方<sup>(10)</sup>

の豪傑の士は、多く黎朝に帰服した。帝は阮淦を太師興国公に任じ、他の將軍たちもみな序列に従って封じられた。軍事・民事全て大小の区別無く、みな阮淦にその処置を一任した。日夜協議して、共に黎朝の復興を画策した<sup>(11)</sup>。

【史料2】黎貴惇『大越通史』逆臣伝、莫登瀛26a, 壬辰年(1532)12月条<sup>(12)</sup>

12月、安清侯阮淦と黎朝の旧臣莅国公鄭惟俊・福興侯鄭惟瞭等は、昭宗の嫡子を哀牢に擁立した。翌癸巳年の春に莊宗皇帝は翠輦冊で即位し、年号を元和元年とした<sup>(13)</sup>。

いずれも16世紀ベトナム史についての基本史料であり、確かにこれらに拠れば、莊宗擁立は阮淦が主導し、莊宗朝は阮淦主導の政権であったと理解できる。

これに対して、八尾隆生[八尾2009:394]は水注鄭氏(阮淦の後継者となる鄭検とは無関係)の家譜から阮淦を立役者とする通説に反対する言説を紹介している。実は、同様の見解は年代記史料にも確認されるのである。それらによれば莊宗擁立過程には阮淦とは別の勢力が大きな役割を果たしている。

【史料3】『大越通史』逆臣伝、莫登庸18b, 癸巳年(1533)春条

癸巳年の春、黎朝旧臣の莅国公鄭惟暖・福興侯鄭惟悦・左都督鄭惟瞭などは、莊宗を擁立して哀牢の地で即位させた。年号を立てて元和元年とした。国主の系統はよりどころを得て名分は明らかとなった。即位に功績のあった諸將に官爵を与えた<sup>(14)</sup>。

【史料4】A4本『大越史記統編』(漢喃研究院蔵A4(=VHc00626)本。以下A4本) 卷16巻頭

莊宗裕皇帝[諱は寧、また炯とも言う。昭宗の長子で、在位すること十六年、享年三十五]。

帝は文武の才能と乱世を治めようという志があった。まず勲功ある親戚の鄭惟俊・鄭惟僚が擁立して君主にいただき、次いで黎朝旧臣の阮淦が補佐した。(当初は)険しい山や蛮族の地にあり、兵力は少なく、辺境をさすらって本拠を定めて落ち着くこともできなかったが、うまく徳を広め(復国の)手立てを始め、

一心に国の回復を図った<sup>(15)</sup>。

【史料5】A4本卷十六、癸巳元和元年（1533）春正月条

癸巳元和元年春正月、莊宗は即位した。初め昭宗は皇子の寧を西都に留め、蒞国公鄭惟俊に命じて清華を守って併せて寧を保護させた。昭宗は自ら兵を率いて楽土に出て莫登庸を討たんとしたが、敗北してしまい、昭宗は登庸に捕まって京師に連れ戻され、鄭惟俊は水注冊に逃れた。皇子寧はこのとき十一歳で永興冊にいた。黎蘭は彼を抱いて哀牢国に逃亡し、名を灼と改めた。その他の皇族もみな姓を改め名を隠し、林野に逃れ隠れた。癸巳年（1533）にいたって鄭惟俊は、弟の福興侯鄭惟悦・左都督鄭惟瞭などとともに、黎朝の旧臣・遺民を糾合して、ともに黎寧を戴いて翠驛冊に至り、これを立てて帝位に即けた。このとき寧は19歳で、岑下冊を行在とした。哀牢の頭目の乍斗は、兵粮の援助を申し出た。帝は心を寄せてこれに頼り、奮い立って進撃しようとした〔鄭惟俊等はみな雷陽県水注冊の人である。開国功臣安国公鄭克復の孫である〕。黎朝旧将の安清侯阮淦は父安の茶鱗州に拠点を置いており、使者を遣わして来朝したので、大將軍興国公に任じた。慶陽侯の武文淵は、宣光の収物州に拠点を置いており、使者を遣わし上表文を持ってきたので、平東將軍嘉国公に任じた〔阮淦は清華の宋山県嘉苗社の人であり、開国功臣沱国公阮公笋の曾孫で、（その長男である）禎国公德忠の弟の孫である。武文淵は海陽の嘉福縣巴東社の人である〕<sup>(16)</sup>。

これらはいずれも鄭惟俊を中心とする勢力（水注鄭氏）を莊宗擁立の主体としており、事情は相当に変わってくる。【史料5】の原註にあるように、鄭惟俊らは鄭克復の孫で<sup>(17)</sup>、阮淦に同じく清華出身の開国功臣の子孫であり、水注冊は皇帝黎氏の本貫地藍山 Lam Son とチュー川 sông Chu を挟んだ対岸に位置する。やはり、【史料5】によれば、鄭惟俊らが黎寧（莊宗）を擁立した後、父安で活動していた阮淦がこれに合流したことになる。【史料2】と【史料3】だけを比較すれば、必ずしも矛盾するわけではない。だが、【史料1】

(正和本) 及び【史料4～6】(A4本)の記載と並べてみれば、『大越通史』にはこの2系統の情報が混在していることが明瞭となる。では、いずれの見解を是とすべきであろうか。A4本に次の記事がある。

【史料6】A4本巻16, 甲午元和2年(1534)春条

明朝がさらに両広に命じて調査させたところ、武文淵が具状して述べるには「我が国は莫登庸父子の篡奪を被ったものの、忠義の士であればその頭目に重臣の鄭惟駿等がおり、光紹帝(昭宗)の子黎愷を推戴して国政を助けて、清化路に拠っています。鄭嶋・鄭嶠は太原に拠り、阮淦等は父安に拠り、阮仁蓮は広南に拠っています。これらの者たちはみな忠義の心は故国にあり、その志は復讐を(果たそうと)励んでいます。各々兵を擁して土地に拠り、国難を救わんと図っております。我々武文淵兄弟は、我が国の王(である黎帝)の命を奉じて、外鎮に出て宣光路地方を領有しております。深く天朝の徳義(賞罰が当を得ること)を望んでおりますので<sup>(18)</sup>、軍を興して罪を伐ち、それによって名分を正し民草を救われんことを乞います」と<sup>(19)</sup>。

この武文淵の具状は明側の複数の史料にも収録されている。相互に異同があるが、もっとも整ったものは、『殊域周咨録』に見える。かなり長いので、【史料6】に対応する箇所のみ掲載する。

【史料7】嚴從簡『殊域周咨録』巻6 安南(中華書局本pp.215-216, 『続修四庫全書』第735冊所収, 明・万暦刻本, pp.631-632)

安南総兵使慶陽侯武文淵等らが上申するには、「嘉靖16年(1537)2月28日に、武文淵等が受け取りました天朝から派遣された官員の趙大官(趙光祖)から送られた2通の公文によりますと、安南国の事情を調査されとのこと、(中略)それ故に趙大官の今回の照会があったのでしょうか。文淵らは田舎にいるとはいえ、どうして心を尽くしてお答えしないことがありましようか。(中略)逆臣莫登庸父子が国と王位を奪い、主を弑し民を虐げてきたことを知ろうとするならば、事情は以上のようなものです。ここをもって我が国の忠義の士では頭目に重臣の鄭惟駿等があり、共に光紹(昭宗)の子の黎愷を推戴し、国政を

助けて、清化路に拠っています。鄭嶋・鄭嶠は太原（太原）に拠り、阮淦等は義安（乂安）に拠り、阮仁蓮は広西（広南）に拠っています。これらの者たちは皆、義は故の主（黎朝）にあり、志は仇を伐とうと励ましており、各々兵衆を擁して領地に割拠し、国難を救おうと図っております。（中略）この（黎朝復興・莫氏打倒の）ために武文淵兄弟等は我が国の王命を奉じて宣光路地方を領有し、深く天朝の徳義を望んでおります。恭しく思いますに、皇帝陛下は広い徳と大きな度量とで苦難にある人々を救います。周王が紂王を伐った行いを発揚し、人君が君主を殺して位を奪った者を誅殺することを厳しく（行い）、名分の誤りを正して、人民の苦しみを救い、内外を安んじて下さい。（後略）」<sup>(20)</sup>

【史料6】は1534年の両広経由の情報だとし、【史料7】は1537年の雲南経由の情報とする違いがある。趙光祖は雲南の臨安衛指揮で、武文淵が雲南巡撫汪文盛（着任は1536年（嘉靖15））に書を送ってベトナムの情勢を知らせていたことは明側の各種史料に在証されており間違いない<sup>(21)</sup>。また、明が広西経由でベトナムの情報収集に動き出すのは1537年（嘉靖16）に入ってからであることから<sup>(22)</sup>、年次は【史料7】を採るべきだろう。武文淵の上申は反莫朝の立場からのプロパガンダという性格を持つため、必ずしも当時のベトナムの状況を正確に伝えているとは限らず、地名にも若干の齟齬がある。とはいえ、両者が基本的に一致していることは注目してよい<sup>(23)</sup>。少なくとも武文淵は鄭惟俊らを莊宗擁立の主体と認識している。

【史料5】によると、1525年に父昭宗が莫登庸に捕まった際、黎寧は哀牢に、鄭惟俊は故郷の水注冊に逃亡する。そして、1533年に至って鄭惟俊らに擁立されて翠驪冊で即位し、哀牢の岑下冊を行在にしたとある。翠驪冊は、昭宗が莫登庸に捕縛された良政州の翠舉冊<sup>(24)</sup>と同じ場所と思われ、チュー川の上流にして現在のラオス・ベトナム国境にほど近い地域である。昭宗軍の主力は鄭綏・鄭惟俊を中心とする水注鄭氏の軍勢であった<sup>(25)</sup>。鄭惟俊が昭宗の命を受けて黎寧を保護し、擁立する主体となったという記述は合理的であ



る。

以上から、正和本以前の史料で一貫して阮淦主導説を支持するのは正和本のみであることが知れる。さらに、水注鄭氏の家譜に拠れば、莊宗の妻（中宗の生母）は鄭惟俊の娘の可能性があり<sup>(26)</sup>、【史料6・7】に見える鄭嶋・鄭嶠も水注鄭氏の人間で〔八尾2009：394注37〕、1537年に北京に到着した明朝への求援使節も鄭惟俊の同族である〔大澤1975：348〕。莊宗と鄭惟俊を繋ぐ糸は阮淦よりも相当に太いことが知れる。これらを総合すれば、我々は鄭惟俊こそ黎寧を擁立した人物と見做すべきであろう。後述するように鄭惟俊系勢力の活動は早くに史料から消えてしまい、清華黎朝では阮淦及びその流れを汲む鄭検が主導権を握ることになる。上掲史料で人名・官職に異同が多く、『大越通史』において両者の見方が混在しているのは、彼らの勢力が没落し後代に広く伝えられなくなったことを反映していると考えられる。特に正和本の記述は、阮淦の配下から立身した鄭検が政権を握った後世の状況を意図的に遡及させたものに違いない。

### 3 阮淦の権力掌握と清華黎朝の動向

前節にて、黎莊宗（黎寧）擁立は通説と異なり、鄭惟俊ら水注鄭氏によるもので、阮淦は後にこれに合流した可能性が高いことを示した。では、阮淦はどの段階で莊宗と合流し、主導権を握ったのであろう。本節はこの点を検討する。

阮淦の活動は莊宗擁立以前から確認される。1529年には哀牢に逃れて後に行在となる岑州を与えられ、翌年には清華で蜂起して莫朝に敗れた黎意の残党を吸収している。次いで、1531年に清華に侵入し、一時は紅河デルタに侵攻する勢いを見せたものの、莫朝軍に敗北して再び哀牢に撤退した<sup>(27)</sup>。【史料5～7】では、莊宗即位の前後、阮淦の活動拠点を清華南隣の父安山間部だとしている。清華では、阮淦や前述の黎意以外にも阮公淵らが蜂起したが鎮圧され<sup>(28)</sup>、1532年10月に、莫朝は新たに楊執一と黎丕承とを清華の統治者に任命して支配の梃子入れを図っている。1531年に清華から撤退して以



降、阮淦はより手薄と思われる父安方面に軍事活動の比重を移したのかもしれない。このように、莊宗の擁立は清華の反莫勢力が次々と敗北する中での出来事だった。哀牢という後背地に拠点を持つものの清華から追い出されて手詰まり状態の阮淦が、反莫朝の正統性を得るために莊宗に使者を送り、莫朝の攻撃を怖れた莊宗・水注鄭氏がこれに応えたのが実態だったと考えられる。

このように当初からいわば寄り合い所帯として出発した清華黎朝であったが、挙兵したとはいえ数年は逼塞を余儀なくされるような小勢力であった。早くも挙兵翌年の1534年には、莫朝の攻撃を受けて南方の広南に追われており、軍事的に対抗できる程ではなかったことが窺える<sup>(29)</sup>。莫朝による次の軍事行動は1542年のことで、この頃になってやっと黎朝は莫朝にとって軍事的脅威となりうる勢力になったのだ。他方、この時期の莫朝は明に自らを承認させることが焦眉の課題であった<sup>(30)</sup>。領土の割譲や従来 of 安南国王に代わって都統使に封ぜられることを甘受したような、莫朝の明に対する低姿勢の背景に反莫勢力の存在があったことは事実であろう。しかし莫氏にとっては、反莫氏勢力の実際の軍事的脅威よりも、対明求援使節、すなわち明の介入の可能性の方が問題だった。

1537年に清華の一半を任せられていた黎丕承が来降した<sup>(31)</sup>、黎朝の明確な軍事行動の初見はようやく1539年のことである。哀牢から清華に侵攻し、黎朝揺籃の地である藍山を含むチュー川上流域を確保している。さらに莫朝第2代皇帝莫登瀛が1540年に、初代皇帝で太上皇帝となっていた莫登庸が1541年に相次いで没するという幸運にも助けられ、1543年に清華の主邑の1つである西都を攻略し、清華・父安に地歩を築くことに成功した<sup>(32)</sup>。

前節にて確認した通り、阮淦は当初から黎朝を牛耳っていた訳ではない。ではその後に通説の如く阮淦が主導する政権が成立したのであるか。私はこれにも疑問をもっている。少なくとも【史料1】に見える「凡そ軍・民の事は大小となく、悉く皆なこれに委ぬ」といった状況は、あったとしても彼が殺害される直前の時期だったと考えている。そこでまず、莊宗擁立の主体であった鄭惟俊系勢力

について見てみよう。彼らの活動は1530年代には明への求援使節などに見出せる〔大澤1975：348-349〕。それ以外で鄭惟俊系と特定できる形で史料に現れるのは次の2事例である。

【史料8】A4本巻16、丙辰元和4年（1536）条

討賊將軍福興侯の鄭惟悦は帝を迎えて清華へ戻った<sup>(33)</sup>。

【史料9】『歴朝憲章類誌』（東洋文庫蔵写本（X-2-38）、以下『類誌』）  
巻10、人物誌、鄭惟俊

そのころ昭勲公（阮淦）が兵を出して莫氏を討伐しようとしたが、鄭惟俊は（ラオスに繋がる）上流の地方を守備し留守して、馬や兵を調達し、黎朝の旧将達とともに蛮族を慰撫して兵士を訓練した。国を建て、本拠を強固にし、（皇帝を）補佐するなど功績は多い。元和10年（1542）に死去した<sup>(34)</sup>。

「時昭勲公出師征伐」という記述から推して、【史料9】は黎朝が軍事行動を活発化させる1530年代末から40年代初頭の状況であろうが、後方支援の任にあたっていたことが記されている。鄭惟俊系勢力は引き続き黎朝内で一定の地位を占めていたようだ。

阮淦も当初から黎朝内で有力な立場にあったことは間違いないようで、莫朝の明朝に対する申し開きでは、莊宗を「為阮氏子」としている<sup>(35)</sup>。次いで1540年代前半の清華・乂安地方での軍事行動記事に姿を見せ、主将として黎朝軍を率いている。

【史料10】正和本巻16、壬寅元和10年（1542）条（校合本p.848）

莊宗は瑞郡公何寿祥を御營提統に任じ、自ら進んで敵地の攻略を図った。太師興国公阮淦に命じて、諸軍団の将士を統率して先に行き、清華・乂安などの地方に進攻させた。二鎮の地方の黎朝旧将や豪傑の士は多くこれに帰順した。黎朝側の軍の声望は益々さかんとなった<sup>(36)</sup>。

【史料11】A4本 巻16 癸卯元和11（1543）正月条

癸卯元和11年正月、莫朝の西国公阮敬が清華に侵入した。阮淦は阮敬の軍と戦いこれに大勝した。諸県を平定し、軍を分けて駐屯して防御にあたらせた。岐郡公は古梵江を守り、福郡公は玉盃市を守り、和郡公（頼世榮）は広昌県を守り、西郡公黎丕

承は扶興を守り、渭郡公と唐郡公は父安に留まって（そこを）  
守備した<sup>(37)</sup>。

A4本の1540年代の部分は多くの条文で繫年が一年後ろにずれている。どちらの記事も『大越通史』の「春二月、莊宗自將經畧清華，遣阮塗攻父安。福海遣兵拒之」（逆臣伝 莫福海42b-43a，元和10年（1542）春2月条）に対応する記事であろうから，1542年のことで，同じ事件を表していると考えられる。その後も攻め寄せた莫軍を撃退しさらに山南へ出兵するなどの活躍を見せている<sup>(38)</sup>。しかし阮塗の勢力は鄭惟俊らを圧倒するほどのものではなかったようだ。

【史料12】A4本巻16，甲辰元和12年（1544）条

莊宗は兵を進めて西都城に出て<sup>(39)</sup>，弘王莫正中<sup>(40)</sup>の軍を破った。莫軍の総鎮大將軍忠厚侯<sup>(41)</sup>〔弘化県の人〕は衆を率いて降伏し，西都城の南門で帝に拝謁した。（中略）その頃阮塗が，まだ哀牢にいたのは，水注冊の族の諸將と不和になったので，帝の清華攻めに同行しなかったためである。帝は鄭公能に詔を奉じて彼を呼び寄せさせた。塗はそこで兵馬を整えて，すぐさまに出発し，義路江の行在で帝に拝謁した。帝は大いに悦び，阮塗を太宰・都將に昇進させ，諸軍団を統率させた。そして阮塗に命じて兵を分けて進軍して諸県を平定させた。やがて鄭公能は背いて広平県の山地に拠った。帝は翼郡公（鄭検）に命じて討伐・誅殺させた<sup>(41)</sup>。

この事件も繫年がずれており1543年の出来事である。正和本もほぼ同文を載せるのだが，「以與水注族諸將不協」の一句が見えない。「水注族諸將」とは【史料5】から見ても鄭惟俊系勢力に違いない。莊宗の親征に同道しない理由が鄭惟俊系勢力との不和というからには，鄭惟俊系勢力が遠征軍の主体であったろう。西都は清華の主邑の一つであり，莫正中は皇帝莫登瀛の弟である。莫朝側も相応の規模の軍勢を備えていたと考えられる。阮塗抜きでこの作戦が実行できたことは，鄭惟俊系勢力が一定の軍事的力量を備えていたことを示す。しかし，参戦しなかったにもかかわらず莊宗が阮塗と和解し昇進させたということは，阮塗を処断できない事情があったことを

窺わせる。莊宗側は西都を攻略する力があったとはいえ、莫朝と全面対決するためにも阮淦の勢力は無視できないものがあつた。

阮淦には純軍事力以外にも、八尾の紹介する北部山地に広がる彼の一族のネットワークがあつた〔八尾2009:348-400〕。もし阮淦が莫氏に投降すれば、敵が増えるだけでなく後背地も危うくなる。莊宗を保護・擁立した鄭惟俊は既に没しており（【史料9】）、莊宗としても阮淦を繋ぎとめることに腐心せざるを得なかつた筈である。

阮淦が任ぜられた都將は総司令官を示す職だろうが、タイトルとしての使用は管見の限り阮淦に使用されたものが最初であり、かつ以後も歴代鄭氏当主以外にはこの称号を帯びたものを見ない。軍事面での阮淦の総大將としての地位が確認されたのだろう。官爵でもこの時点で太宰の阮淦に比肩できそうなのは、挙兵時に少尉雄国公に任じられた宦官の丁公と宣光に拠る嘉国公武文淵くらいしかない。この時点で彼が黎朝内部の序列で最有力者と認められたとみなしてよからう。

この昇進との関連も含めて鄭公能殺害の原因はよく分からない。出身地が不明のため鄭惟俊らとの関係は不明だが、1539年の授爵記事で「諸將」の先頭に彼の名があり<sup>(42)</sup>、政権内での序列は高かつたと考えられる。討伐にあたつたのが阮淦の女婿鄭檢だったことを考えれば、阮淦との対立を想定することも可能であろう。政敵の排除を思わせる記述はこの一例のみだが、鄭公能の討伐を「帝」が命じたという記述を上述の昇進と併せて考えると、阮淦派が鄭惟俊系に代わって莊宗を押さえたとも理解できる。かくして清華黎朝を掌握したかに思われた阮淦だが、まもなく莫朝の降將によって暗殺される。この事件に関して注目すべき記述がA4本に見られる。

【史料13】A4本、巻16、丙午元和14年（1546）5月乙亥条

乙亥、阮淦は降將の忠厚侯に毒を盛られて没した。忠厚侯は元々莫氏に仕える宦官で偽って（黎朝に）降伏した。帝に不利になるよう画策しようとしたが、チャンスがなかつた。そこで阮淦を迎えて帝の営に行つて宴席を設け、毒を瓜中に仕込み、阮淦は自分の軍営に戻つて悶え苦しんで死んだ。忠厚侯は夜にまぎ

れて莫氏のもとに逃げ帰った。淦の子弟や配下は帝の陰謀ではないかと疑い、怨み言を述べた。帝はそこで脱出して避難した。翼郡公の鄭検はこれを聞いて、部下を率いて帝に追隨して護衛し、帝にお願いして言った「どうか陛下、宮殿へお戻りください。私は力を尽くしてお助けします、他意のない事を保証いたします」と。帝は提統御營に命じて、阮淦の麾下の将兵に大義を説いて諭したので、彼らはみな帰順した<sup>(43)</sup>。

この記事も繫年がずれており1545年の出来事である。暗殺された阮淦の配下が莊宗を疑い一触即発の事態に至ったとある。莊宗は、阮淦の女婿である鄭検の説得を受けても、別途、提統御營を派遣して諭するなど全く信を置いていない。

A4本は、暗殺の直前に阮淦が莊宗を奉じて岑下冊に戻った際、帝が阮淦による篡奪の陰謀を疑い、何仁政に密勅を下して兵を集めさせたという記事載せているが<sup>(44)</sup>、『黎朝中興功業実録』に対応する記述がある。阮淦による莊宗擁立を聞いて遠近から人々が挙って参集したが、彼らの忠誠心は未だ十分ではなかったという記載の直後に附録として、次の勅諭を紹介している。

【史料14】『黎朝中興功業実録』（漢喃研究院蔵A.19本）巻1，3b

附録：元和14年（1546）に莊宗裕皇帝が錦水縣古隴冊の何仁政に与えた勅諭に「近年、阮淦が朕を岑下冊に迎えて、諸将に号令したが、思いがけず、阮淦は密かに篡弒を図った。汝らが国のために身を捨てて（朕を守って）くれたこと、朕は甚だこれを嘉する」とある。今もその文書は残っているという<sup>(45)</sup>。

ここでは、阮淦による篡奪の陰謀は事実で、この危機を何仁政が救ったとされている。また、次の記事も莊宗の阮淦派への警戒を伝えている。

【史料15】A4本巻16，丙午元和14年（1546）7月4日条

7月4日、莊宗は再び湯下冊に行って将士を糾合しようとし、何仁政に密勅を下して土酋の兵民を集めて行在に赴かせ、そしてその期限を10月上旬とした<sup>(46)</sup>。

阮淦が殺害されたのが1545年5月、同年8月にその女婿である鄭

検が都将となって黎朝を率いることになる。さすれば、【史料15】の密勅も【史料13】を勘案すれば、阮淦派を憚ってのものであり、【史料14】の勅諭と同時期に出された可能性が高い<sup>(47)</sup>。阮淦と微妙な関係にあり、その死後に配下とも対立した莊宗は、何仁政を通じて独自に軍事力の強化を図ったのだろう。

【史料13～15】に見える莊宗と阮淦一派との関係は緊迫したものがある。となれば、後期黎朝成立当初から莊宗が阮淦の傀儡であったとの認識は成り立たない。1540年代に入って、後ろ盾であった水注鄭氏の力が弱まり阮淦が抬頭するのと並行するように、莊宗と阮淦との間の溝が広がっていったのであろう。篡奪弑逆の陰謀が事実かどうか速断は禁物だが<sup>(48)</sup>、阮淦暗殺直後の莊宗や阮淦配下の言動からは、両者の間に相当な疑心暗鬼が生じていたことが窺える。

このように、A4本を主史料としてみた場合、正和本では揺るぎなき第一人者のように記されている阮淦の地位は、軍事的には強力だが有力な外様のようである。少なくとも、皇帝莊宗は無力な傀儡で、清華黎朝は事実上阮淦政権だったかのような見方は成り立たない。

#### 4 阮淦期の清華黎朝の人的構成

前節までにて阮淦の地位の再検討を行い、その結果、1545年以前の清華黎朝が必ずしも阮淦を中心に回っていなかったことが明らかになった。ここではより詳細に人的構成の全体像を示す。1533～45年、つまり黎朝復興以降阮淦暗殺までの時期で何らかの形で史書<sup>(49)</sup>に登場する人物は30名強であるが、個人のディテールを記すことは殆ど無く情報量は多くない。爵位のみで姓名が不明の者が14名おり、しかも殆どが郡公爵を有して差が無いため、爵位から序列を再構成することもできない。他方、『類誌』人物誌や『大越通史』の列伝あるいは家譜など伝記史料には、「莊宗の蜂起に応じて馳せ参じた」と記すものが少なくない。しかし、殆どが具体性に欠けるうえ複数の史料にまたがって登場することが少ないため、そのままでは信憑性の確保が難しい。故に、地縁・血縁などの情報が得られるものを

列举した上で、それら数少ない情報をもとにしてグループ化し、年代記と対応関係がある程度見られる家譜史料を援用して政権の人的構成を復元してみたい。

まず、莊宗擁立の主体となった水注鄭氏は開国功臣鄭克復の子孫である。鄭克復は太祖黎利の甥、父の鄭汝箴は黎利の従兄弟にして義兄弟であり、父子揃って封爵功臣に列せられた名門である〔八尾2009：65〕。鄭氏は嘉苗阮氏と共に襄翼帝の即位にも貢献し<sup>(50)</sup>、鄭惟慥や鄭惟岱など前期黎朝末の内乱で活躍する人物を輩出している。しかし、鄭惟慥の襄翼帝殺害をきっかけに、鄭氏と嘉苗阮氏は対立抗争を繰り返して、これが前期黎朝の崩壊につながる〔八尾2009：385-400〕。鄭惟慥は鄭惟岱の子で、昭宗の時代から軍事行動が確認され<sup>(51)</sup>、族弟の鄭惟懐は明朝への求援使節となっているが、1540年代中葉以降、水注鄭氏は年代記から姿を消すだけでなく、家譜によっても動向が判然とせず、早くに没落してしまったようだ。史料によって人名表記の揺れが大きいのも、その反映と考えられる。

阮淦の属す嘉苗阮氏も開国功臣の家系とされるが、初代阮公筭は各種開国功臣リストに名が現れず、格是水注鄭氏より大きく劣る<sup>(52)</sup>。第2代の阮德忠が聖宗擁立に貢献して一族揃って政権中枢に進出し（德忠の娘は聖宗の皇后にして次代憲宗の生母）、德忠の甥である阮文郎は襄翼帝即位の最大の功労者だった。但し、主要な人物はいずれも阮淦とは別の支派から出ており、阮淦自身は傍流的地位にあったようだ<sup>(53)</sup>。この他、八尾〔2009：398-400〕が系図にまとめたように、阮氏の家譜は、阮淦の同族が多数後期黎朝に参加していたとする<sup>(54)</sup>。例えば阮淦の弟阮宗泰はベトナム地方の太原・高平を拠点に活動しており、ついには土着して姓を改め藩臣閉氏の祖となったという<sup>(55)</sup>。また第5支の阮僇は山西を拠点に宣光武氏と連合して、清華の宫廷とも連携を取りつつ莫氏と戦っている。その子の賢と孫の張も義兵を糾合して少なくとも17世紀初頭まで山西の臨洮府に拠っている。第2支の直系である阮辰譽（時譽）は阮淦の蜂起に従って順平・正治年間（1549-56）に戦功を挙げ、死後大王号を加封されたとあるなど、嘉苗阮氏は清華内外の広汎な地域で活



動している。

阮淦個人と関係する者としてはまず女婿で1539年に翼郡公に封じられた鄭検がおり、前述の通り後に清華黎朝の主将となる。また、鄭検の従兄鄭桃は鄭検より先に阮淦に従っていた<sup>(56)</sup>。初出は1559年ではあるが、興化に拠る鄧定は初め阮淦に従って哀牢に避難したとあり<sup>(57)</sup>、阮淦に近い立場だった可能性がある。阮淦没前後から南方の広南に鎮守した裴佐漢に関しても、莊宗擁立以前から阮淦に従っていたとする史料がある<sup>(58)</sup>。ただ、鄧定や裴佐漢に関する記述は、後に阮朝が成立したことを受けての潤色の可能性も高く、全幅の信頼を置くわけにはいかない。

次に清華の山地部出身者が見られる。正和本とA4本で異同があるが、1539年に清華黎朝では14人が郡公に任じられている。うち名前がわかるのは鄭検（翼郡公）・鄭公能（宣郡公）・頼世栄（和郡公）・黎丕承（西郡公）・何仁政（瑞郡公）<sup>(59)</sup>である。このうち頼世栄と何仁政はその伝記から山地民の首長（土酋）であった可能性が高く<sup>(60)</sup>、何仁政の子の寿禄（寿祥）も御営提統に任じられている<sup>(61)</sup>。また何仁政は【史料13・15】にあるように、莊宗の密命を受けて山地民の糾合に動くなど独自の動きを見せており、おそらくは【史料15】を受けて黎添禄が黎朝に合流している<sup>(62)</sup>。ゆえに彼の立場は阮淦よりも莊宗に近かったと考えられる。

この他、拳兵以来の臣である宦官の丁公が1545年に太尉雄国公として「御営を監守」するなど重要な地位を占めたようだが、具体的なことはよく分らない。同じく具体的な活動は分らないが、『大越通史』の列伝は黎朝初代黎利を助けた功臣黎来の子孫である黎公態・黎公慈が黎朝に参加したとする<sup>(63)</sup>。加えて、黎丕承のような莫氏から降ってきた者が存在して、初期の清華黎朝の宮廷が構成されていた。また清華外にあって、これと提携・臣従しつつ各地に割拠する勢力が存在していた。

## 5 結論

以上をまとめると、黎莊宗の擁立主体は鄭惟俊ら水注鄭氏であり、

阮淦はその直後に合流したと考えられる。後期黎朝の成立から10年近く阮淦は清華黎朝の有力武将の1人に過ぎず、宮廷を掌握していなかった。莊宗との関係も円滑なものではなかったことが窺え、それは17世紀後半の歴史編纂にまで影響が及んでいる。

阮淦暗殺（1545年）以前の清華黎朝の人的構成は前期黎朝の政治地図を色濃く継承していたと言える。10世紀以来のデルタと清華・父安（Thanh Nghệ）という異質な地域同士の覇権争い〔Taylor 1998: 954-957〕とまで言い切る材料は無いが、清華に偏った地域性は明らかである。15～16世紀初頭の政情を、デルタと清華との対立・抗争の歴史という観点から分析した八尾は、清華勢力による権力奪取を三度の波に例えた〔八尾2001: 207-213〕。氏の言を借りるならば、後期黎朝の成立は《第四の波》と呼ぶにふさわしい。哀牢との連携・山地民の参加は《第一の波》、すなわち黎利の藍山起義との連続性を示す。開国功臣子孫が中心となって皇族を擁立した構図は、《第二の波》聖宗擁立、《第三の波》威穆帝打倒の時と同じである。清華山間部に拠点を置く戦略も、《第一の波》と共通する。

政権を主導した鄭惟俊と阮淦は共に“清華出身”の“開国功臣の子孫”であり、成立当初の後期黎朝は、水注鄭氏と嘉苗阮氏を中心とした開国功臣子孫による連合政権だと規定できる。彼らの権力闘争は、開国功臣の権力闘争が熾烈を極めた15世紀前半の太宗・仁宗期や、鄭綏・阮弘裕ら開国功臣子孫が覇を競った16世紀初頭の状況と同じく、開国功臣連合政権内部での権力闘争の再現である。鄭惟俊が父を嘉苗阮氏に殺害されるなど、水注鄭氏と嘉苗阮氏とは一面で仇敵同士だった。しかし、16世紀初頭の戦乱を通じて双方とも有力な人物が次々と斃れ、それを利用して新王朝を建てたのが莫登庸である。辛うじて生き残ったのが鄭惟俊や阮淦であり、仇敵同士が手を組んで亡命政権をラオスに作らねばならぬほど、両族（そして全体としての開国功臣子孫）は疲弊していたのだ。

連合政権の均衡が崩れ阮淦の優位が明らかになったのは彼の死の直前であった。皇帝莊宗も独自に軍事的基盤の獲得を図っており、単純に阮淦の傀儡とするような考え方<sup>(64)</sup>は成り立たない。阮淦の

地位は、鄭惟俊の死と前後するように、1540年代に入ってから徐々に高まっていったと考えるべきだろう。

他方、前節にて概観したように、後期黎朝成立前後の時期には、紅河デルタを囲繞する山地（高平・太原～宣光～山西西部～清華）に広く反莫朝勢力が展開しており、そこには嘉苗阮氏と水注鄭氏がともに確認できる。つまり、開国功臣とその子孫への賜田土、私的開拓、地方官赴任などによって、彼らが山地部へネットワークを拡大していったことを示唆している。後の1551年に、黎朝はこの山地ルートを使って西からデルタを迂回、北部山地を経由して紅河デルタを攻撃する作戦を敢行し、1年近く戦線を維持した。この大遠征が1530年代におけるデルタ外の政情の延長線上にあることは明らかで、単純な15世紀の再現ではない<sup>(65)</sup>。そして清華黎朝の政権構造自体も、清華出身だが開国功臣の子孫“ではない”鄭検が清華側の主将となることをきっかけとして変化していく。

### 【文献】

- 蓮田隆志 2003：「『大越史記本紀統編』研究ノート」『アジア・アフリカ言語文化研究』66, pp.299-317。
- 蓮田隆志 2014：「ミエン集落磨崖碑と成立期のベトナム後期黎朝」『資料学研究』11, pp.1-14。
- 蓮田隆志 2016：「范篤攷：16世紀ベトナムの新興勢力と中興功臣」『東アジア：歴史と文化』25, pp.1-17。
- 大澤一雄 1975：「黎朝中期の明・清との関係」山本達郎（編）『ベトナム中国関係史：曲氏の抬頭から清仏戦争まで』山川出版社。
- Tạ Ngọc Liên (chủ biên), Nguyễn Thị Phương Chi, Nguyễn Đức Nhuệ, Nguyễn Minh Tường và Vũ Duy Mền. 2007: *Lịch sử Việt Nam, tập III thế kỷ XV-XVI*. Hà Nội: Nxb KHXH.
- Taylor, Keith W. 1993: Nguyen Hoang and the Beginning of Vietnam's Southward Expansion. In Anthony Reid (ed.), *Southeast Asia in the Early Modern Era: Trade, Power, and Belief*. Ithaca and London: Cornell UP., pp.42-65.
- Taylor, Keith W. 1998: *Surface Orientations in Vietnam: Beyond Histories of*

Nation and Region. *Journal of Asian Studies* 57(4), pp.949-978.

八尾隆生 2001：「収縮と拡大の交互する時代：16—18世紀のベトナム」石井米雄（責任編集）『東南アジア近世の成立』岩波書店（岩波講座 東南アジア史 3），pp.205-231。

八尾隆生 2009：『黎初ヴェトナムの政治と社会』広島大学出版会。

## 註

- (1) 南進についての最新の史学史的整理は，Claudine Ang, Regionalism in Southern Narratives of Vietnamese History: The Case of the “Southern Advance” [Nam Tiến]. *Journal of Vietnamese Studies*. 8(3), 2013.
- (2) 但し，かつてテイラー [Taylor 1993, 1998] が批判したように，広南阮氏について検討する際，無前提に「ベトナム史」に組み込むような素朴な一国史観はもはや通用しない。
- (3) 古くはレー・キム・ガンが中国・イギリス・日本との比較を試みているが，未だ「似たところ探し」の域を出ていない。Lê Kim Ngân, *Chế độ Chính-trị Việt-Nam thế-kỷ XVII và XVIII*. Sài Gòn: Phân-khoa-học xã-hội viện đại học Vạn-Hạnh, 1974, pp.176-185.
- (4) 石刻史料を全面的に活用して莫朝史を再構成したものに，Đinh Khắc Thuân, *Lịch sử triều Mạc qua thư tịch và văn bia*. Hà Nội: Nxb KHXH, 2001がある。また，2007年に刊行された史学院のベトナム通史第3巻 [Tạ Ngọc Liễn (chủ biên) 2007] は，これまで黄金時代とされて大きく扱われた15世紀と，衰退分裂期として関心があまり払われてこなかった16世紀とで1巻を構成し，かつ16世紀についても多くの紙幅を割く点で画期的である。
- (5) A4本—NVH本系統の歴史叙述が近世ベトナムで正和本と並行して流通していたことについては，蓮田隆志「『華麗なる一族』のつくりかた：近世ベトナムにおける族結合形成の一形態」關尾史郎（編）『環東アジア地域の歴史と「情報」』知泉書館，2014，pp.27-57，[蓮田2016] 参照。
- (6) [蓮田2003] でも留保したように，A4本—NVH本の成立時期は未だ確定し得ないが，18世紀中葉を下ることはないと考えている。
- (7) 近年の研究では [Tạ Ngọc Liễn (chủ biên) 2007: 521]，Phan Huy Lê (chủ

biên), Nguyễn Thừa Hỷ, Nguyễn Quang Ngọc, Nguyễn Hải Kế và Vũ Văn Quân, *Lịch sử Việt Nam, tập II Từ cuối thế kỷ XIV đến giữa thế kỷ XIX*. Hà Nội: Nxb Giáo dục Việt Nam, 2012, pp.267-268; Keith W. Taylor, *A History of the Vietnamese*. New York: Cambridge University Press, 2013, pp.242-243 など。

- (8) 影印はベトナム社会科学院影印対訳本 (VKHXHVN, *Đại Việt Sử Ký Toàn Thư: Bản in Nội Các Quan Bản Mộc bản Khắc năm Chính Hoá thứ 18 (1697)*. 4 tập, Hà Nội: Nxb KHXH, 1998) の第4冊にあるが、日本では参照に不便なので、通行本である陳荆和校合本 (陳荆和 (編校)『校合本大越史記全書』(上・中・下), 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター, 1984-86年) の該当頁数を併記する (頁数は3冊の通し数字)。また、最近中国で刊行された新しい点校本 (孫曉 (主編)『標点校勘本大越史記全書』, 重慶: 西南師範大学出版社; 北京: 人民出版社, 2015年) とも対照したが、本稿で扱う範囲では特に異同は無い。

- (9) ( ) は筆者の補足, [ ] は原注・原割注で、割注の改行は無視する。以下全て同じ。

- (10) 清華・父安と紅河デルタを「南北」ではなく、「東西」と捉える觀念が古くから存在していた。例えば、胡朝が清華に造った都は西都と名づけられ、黎朝もそれに対応させて首都のハノイを東都と命名した。また前期黎朝の太祖黎利の時代には、清華・父安が海西道と名づけられた。

- (11) 十二月、黎朝舊臣安清侯阮淦尊立昭宗之子寧于哀牢。初淦在哀牢養兵蓄銳，使人往國中遍求黎氏子孫，乃得昭宗之子寧，尊立爲帝，改元元和 [是爲莊宗]，以正國統。於是西土豪傑之士，多歸附之。帝拜淦爲太師興國公，及諸將佐皆以次受封。凡軍民事無大小，悉皆委之。日夜協謀，共圖興復。

- (12) 『大越通史』逆臣伝は、Lê Quý Đôn, *Đại Việt Thông Sử*. Lê Mạnh Liêu (dịch), Tủ sách Cổ Văn, Ủy ban dịch thuật, Sài Gòn: Bộ văn hoá giáo dục và thanh niên, 1973所収の古学院蔵VS-15本影印部分の葉数を示す。

- (13) 十二月、安清侯阮淦・黎朝舊臣莅國公鄭惟俊・福興侯鄭惟瞭等，立昭宗嫡子于哀牢。癸巳年春，莊宗皇帝即位于翠驪册，建號元和元年。

- (14) 癸巳年春，黎朝舊臣莅國公鄭惟暖・福興侯鄭惟悅・左都督鄭惟瞭等，

尊立莊宗即位於哀牢。建號元和元年。國統有歸，名義明正。封拜功臣諸將。

- (15) 莊宗裕皇帝〔諱寧，又炯。昭宗長子，在位十六年，壽三十五〕。  
帝有文武之才・撥亂之志。先有勳戚鄭惟俊・惟憭擁戴，繼有舊臣阮淦匡扶。崎嶇蠻洞之間，兵力寡弱，播藩靡定，而能布德兆謀，銳圖恢復。
- (16) 癸巳元和元年春正月，帝即位。初昭宗留皇子寧於西都，命蒞國公鄭惟俊鎮守清華保護之。帝自將出樂土討莫登庸，師既敗，帝爲登庸劫還京，惟俊走水注冊。皇子時方十一歲，在永興冊。黎蘭抱奔哀牢國，改名炯。其餘宗親皆改姓隱名，逃遁林野。至是惟俊與弟福興侯惟悅・左都督惟暉等，糺集舊臣・遺民，相率奉迎至翠韞冊，尊立皇子即皇帝位。辰年十九，以岑下冊爲行在。哀牢酋乍斗，請以兵糧援助。帝傾心結納，興圖進取〔惟俊等竝雷陽水注人。公臣安國公克復之孫〕。舊將安清侯阮淦，據乂安茶鱗州。遣使來朝，拜大將軍興國公。慶陽侯武文淵，據宣光收物州。遣使奉表，拜平東將軍嘉國公〔阮淦，宋山嘉苗人，功臣沱國公阮公笄之孫，禎國公德忠孫任。武文淵，嘉福巴東人〕。
- (17) Trịnh Đình Long, Trịnh Duy Tuân và Trịnh Di. Đồng họ Trịnh Khắc Phục ở Thủy Chú - Vân Đồn. *Cội Nguồn* 3, 1999, pp.17-27, [八尾2009：392-400] 参照。
- (18) 次の【史料7】の対応する箇所「深有望天朝德義」とあるので、ここは「望」が脱落したものと考える。
- (19) 明朝猶命兩廣查勘，武文淵具狀言「本國被登庸父子篡奪，忠義之士則有頭目閭閻如鄭惟俊等，推戴光紹之子黎裡以攝國政，據於清化路。鄭嶠・鄭嶢據於太原，阮淦等據於乂安，阮仁蓮據於廣南。此數者皆義存故國，志勵報讐。各擁兵衆據土宇，以圖濟國難。文淵兄弟，奉本國王命，出領宣光路地方。深有天朝德義，乞興師伐罪，以正名分救生靈」。
- (20) 安南總兵使慶陽侯武文淵等申報曰「今嘉靖十六年二月二十八日，武文淵等見奉天朝委官趙大官遞下公文二道，查勘安南國事由，（中略）故使趙大官有是行也而文淵等雖鄙俚，敢不悉心以陳答之乎。（中略）抑知逆臣莫登庸父子篡國奪位，害主虐民，情節如此。是以本國忠義之士，則有頭目閭閻如鄭惟俊等，共推戴光紹之子莫裡以攝國政，據於清化路，鄭嶠・鄭嶢據於太原，阮淦等據於義安，阮仁蓮據於廣西。此數者皆義存故主，志

- 勳報讐。各擁兵衆，割據土宇，以圖濟國難。（中略）爲此武文淵兄弟等奉本國王命出領宣光路地方，深有望天朝德義，恭惟皇帝爺爺陛下德廣亨屯，量弘拯濟，奮周后伐罪吊民之舉，嚴人君弑君篡位之誅，正名分之乖違，救生靈之荼毒，使內寧外撫。（後略）」
- (21) 大澤一雄「十六・七世紀における中国・ヴェトナム交渉史に関する研究(III)：莫登庸政権を中心として」『史学』39(2), 1966, pp.64-67, [大澤1975：353]。
- (22) [大澤1975：343-344], 鄭永常『征戰與棄守：明代中越關係研究』，台南：国立成功大学，1998, pp.156-157。
- (23) 鄭嶋・鄭曉が太原に，阮淦が父安に拠っているとする記述は、『大越通史』逆臣伝 莫登瀛24ab, 大正元年（1530）条にもほぼ同文がある。
- (24) 正和本巻15, 乙酉（統元）4年（1525）冬10月初9日条（校合本p.831）。タインホア省トゥオンズアン県西部に比定できる。
- (25) 正和本巻15, 壬午（光紹）7年（1522）冬10月18日条（校合本p.829），『欽定越史通鑑綱目』（以下，『綱目』）巻27, 壬午（光紹）7年（1522）冬10月条。
- (26) 水注鄭氏の家譜による [八尾2009：394-397]。この他，『黎皇玉譜』（漢喃研究院蔵 A.678）は「雷陽水注人，一云哀牢國人」とし，A4本は「哀牢人」とする。正和本には言及がない。
- (27) 正和本巻15, 己丑年（莫・明德3年，1529）条，『綱目』同年条，『大越通史』逆臣伝，莫登庸17b-18b, 同莫登瀛24ab。
- (28) 『大越通史』は1528年，正和本は1531年のこととする。
- (29) 「登庸兵尋犯行在，帝幸廣南」（A4本巻16, 甲午元和2年（1534）春条）。『殊域周咨録』は占城界に追われたとしており，『四夷広記』は広南を経て占城界に逃れたとする（愼懋賞『四夷広記』安南，安南国統，玄覽堂叢書統集所収，p.298）。また，後掲の【史料8】が帰還記事と考えられる。
- (30) この経緯については [大澤1975：356-369] に詳しい。
- (31) 『大越通史』逆臣伝 莫登瀛26b-27a。正和本巻16, 丁酉（元和）5年夏4月以降条（校合本p.846）。
- (32) Phan Huy Lê, Chu Thiên, Vương Hoàng Tuyên, và Đinh Xuân Lâm (biên



soạn), *Lịch sử chế độ phong kiến Việt Nam (tập III thời kỳ khủng hoảng và suy vong)*. Hà Nội: Nxb bản giáo dục, 1960, p.15. [蓮田2014: 4-6]。

東  
洋  
学  
報

- (33) 討賊將軍福興侯鄭惟悅迎車駕還清華。
- (34) 時昭勳公出師征伐，俊留守上游，調集馬兵，與諸舊將撫蠻僚訓士卒。  
植國・固本・翊扶之功爲多焉。元和十年卒。
- (35) 『明實錄』嘉靖17年（1538）3月丁酉条。同様の言辭はベトナム側の史料（『大越通史』逆臣伝 莫登庸19b，癸巳年（1533）春条など）にも見える。
- (36) 帝，以瑞郡公何壽祥爲御營提統，御駕以圖進取。命太師興國公阮淦，統督諸營將士先發，進攻清華・乂安等處。二鎮諸舊將及豪傑之士多歸之。軍聲益銳。
- (37) 癸卯十一年正月，莫西國公阮敬入侵清華。阮淦與戰大破之。畧定諸縣，分軍鎮禦。岐郡公守古梵江，福郡公守玉盃市，和郡公守廣昌，西郡公黎丕承守扶興，渭郡公・唐郡公留鎮乂安。
- (38) A4本卷16，癸卯元和11年（1543）2月・3月の各条。
- (39) 正和本は「帝進兵出自西都城」とする。この点の解釈については[蓮田2014: 5-6] 参照。
- (40) 『綱目』卷27，癸卯（元和）11年（1543）条によれば，名を楊執一という。
- (41) 帝進兵出西都城，破僞弘王莫正中軍。其總鎮大將軍忠厚侯[弘化人]率衆降，拜見於城南門。（中略）辰阮淦，猶在哀牢，以與水注族諸將不協，未從行。帝使鄭公能捧詔召之。淦乃整飭士馬，卽日就道，拜謁于義路江行在。帝大悅，加陞太宰都將，節制諸營。命分道進師，撫定諸縣。公能尋反據廣平原頭。帝命翼郡公討誅之。
- (42) 正和本卷16，己亥元和7年（1539）春条。
- (43) 乙亥，阮淦爲降將忠厚侯所毒卒。忠厚本莫中官詐降。欲不利於帝，不得其便，乃邀淦赴本營設食，置毒瓜中，淦回營悶而卒。忠厚夜逃歸莫。淦子弟・部曲疑帝有謀，出怨言。帝乃避出。翼郡公鄭檢聞之，率本部追隨護衛，請於帝曰「願陛下還宮。臣竭力輔佐，保無他慮」。帝命提統御營，諭阮淦麾下將士以大義，衆皆歸之。
- (44) 阮淦奉車駕還岑下。帝疑淦篡逆謀，密勅錦水古隴冊瑞山候何仁政集兵

第  
九  
十  
九  
卷  
第  
二  
号

二  
二  
二

爲援。(A4本巻16, 丙午元和14年(1546)条)。

ベトナム後期  
黎朝の成立

(45) 附録。元和十四年, 莊尊裕皇帝有勅諭錦水縣古隴册何仁政謂「比年阮淦奉迎朕回岑下, 號令諸將, 不期阮淦陰謀篡弑。尔等能爲國捐軀, 朕甚嘉焉」。今存其跡云。

(46) 七月四日, 帝再幸湯下冊糺合將士, 密勅何仁政集土酋兵民赴行在, 期以十月上旬。

(47) 但し, 【史料14・15】の年代については, A4本に見られる繫年のずれを考慮したとき, 1545年(元和13)の出来事だった可能性も残る。

蓮田

(48) 正和本の【史料13】に対応する条文は莊宗と阮淦遣臣との対立や鄭檢の仲裁は一切言及せず, 【史料14・15】に対応する条文は存在しない。『黎朝中興功業実録』は鄭氏の栄光を称える編年史料で, 景治本と正和本の中間に当たる1676年(永治1)の序を持ち, 主編者の胡士揚はじめ, 編者の半数が景治本の編纂にも参加している。よって, 景治本にも【史料13~15】に類する記述があったと想像されるが, 【史料14】は伝聞形での記載であり, 正和本は憶説としてこれを採用しなかった可能性も残る(A4本—NVH本を景治本そのものだと認めるのに問題が残ることについては[蓮田2003: 311-315] 参照)。

(49) ここでは主に正和本・A4本・『大越通史』・『欽定越史通鑑綱目』を指す。

(50) 襄翼帝の生母は水注鄭氏の人間である[八尾2009: 381注12, 394注35]。

(51) 『綱目』巻27, 壬午(光紹)7年(1522)冬10月条。

(52) 本貫地である嘉苗外庄は藍山から遠く隔たった現在のタインホア・ニンビン省境東縁部に位置しており, 黎利軍への参加も遅れたと思われる。

(53) 『阮氏家譜』によると, 阮氏は阮淦の祖父の代で支派に分かれる。阮淦は第4支の出身である。『阮氏家譜』は八尾隆生先生のご厚意で閲覧の便を得た。記して感謝します。

(54) この家譜は莊宗即位時だけでなく, その前後を含めて世代を跨いだ具体的記述が充実している。タインホア省ガーソン県バーディン社マウラム集落 Xóm Mậu Lâm, xã Ba Đình, huyện Nga Sơn に在住する第1支のご子孫宅に伝来する, 順平7年(1555)11月10日付け勅封は, 貢溪侯の阮有貴(家譜では第1支3世孫)が「討賊」に功があったとして, 鄭檢の

二二一

- 「類」によって賞資された際に発給された文書である。家譜にこの賞資の記載はないものの、姓名と爵位が一致する。阮淦の同族が黎朝側に立つて参戦していたことを示すものとして、家譜の信頼性を補強しよう。
- (55) 家譜では荘宗即位以前すでに殿前都総兵使侯爵となっており、しかも1598年の莫敬用討伐まで彼の事跡に含まれている。子孫の記述が簡略なだけに、子孫の事績が混入していると思われる。
- (56) 阮淦在世時の鄭桃の活動ははっきりしないが、鄭検の権力掌握後は、宮廷の警護を担当するなど重要な役割を果たしている〔蓮田2016：9〕。
- (57) 『綱目』巻28, 14a, 己未正治2年（1559）9月条註鄧定。
- (58) Nguyễn Văn Chùng, Dương Minh Chính, Lê Văn Công, Lê Sơn và Nguyễn Văn Thanh. *Trần quốc Công Bùi Tả Hân (Danh nhân lịch sử - văn hóa)*. Hà Nội: Nxb Thanh Niên, 2013, pp.110-112. これによると、彼は父安の出身で、洪徳末以来の「歴世名儒望族」だとあり、開国功臣子孫ではないようだ。
- (59) A4本は瑞山侯とし、『類誌』巻10, 人物誌, 何寿禄に載せる仁政についての記述もこれを支持するが、他は全て郡公でありながら、彼一人侯爵というものも不自然であろう。
- (60) 何仁政については『類誌』巻10, 人物誌, 何寿禄。頼世榮については、蓮田隆志「近世ベトナムの地方社会における治安活動と下級武人」『環東アジア研究』10, 2017, pp.35-38。
- (61) 正和本巻16, 壬寅元和10年（1542）条。
- (62) A4本巻16, 丙午元和14年（1546）11月条。
- (63) 『大越通史』巻31, 列伝, 黎来35a（漢喃研究院蔵 A.1389本）。この部分は古学院蔵版には欠けている。
- (64) 例えば, Nguyễn Duy Sỹ, *Vai trò và trách nhiệm của họ Trịnh trước lịch sử dân tộc Việt Nam*. BNCBSLSTH. *Chúa Trịnh: vị trí và vai trò lịch sử - kỹ yếu hội thảo khoa học*-. Thanh Hoá: BNCBSLSTH, 1995, p.60。
- (65) その意味で、西北・北部山地を捨象するテイラーの枠組み〔Taylor 1998〕は再考の余地がある。

【付記】本稿は科学研究費補助金（課題番号15K02889）の成果の一部である。

（新潟大学現代社会文化研究科・研究員）

after the Chinese Revolt and Massacre in October 1740.

The study leads to two main conclusions, the first of which is that from the latter half of the 17th century on, the VOC expanded the scale of its opium trade under a monopolistic policy, although the results did not always meet expectations. The High Government of Batavia, where the VOC was headquartered in Asia, would set the lowest bidding price at the auctions, then leave the rest of bidding to free competition; and while the Government attempted to create favorable sales conditions by controlling the frequency of the auctions, in reality, it was the Chinese merchants involved who exerted the greater influence on price determination.

Secondly, the Chinese Revolt and Massacre resulted in a diversification of the ethnicity of the auctioneers. Whereas, before the incident, almost all the buyers were Chinese merchants, principal among whom were influential members of the local Chinese community investing enormous amounts of cash in purchasing opium for their businesses, the temporary reduction in the number of Chinese auctioneers caused by the incident presented an opening for merchants of other ethnicities, such as South Asian Muslims (“Moors”) and European free burghers to participate in and influence the auctions throughout the 1740s.

It was in this way that during the first half of the 18th century, the scale of transactions at the auctions grew in size and the participants diversified, as the colonial city of Batavia and its opium auctions became the stage for profit making by both the VOC and a myriad cast of private merchants.

## The Formation of the Restored Lê Dynasty

HASUDA Takashi

The aim of this article is to examine the circumstances surrounding the formation of Vietnam’s Restored Lê Dynasty (nhà Lê trung hưng; 後期黎朝) and identify its founding members.

As to the former topic, there are two conventional interpretations: 1) the foremost figure in the founding was Nguyễn Kim 阮淦, a member of the Nguyễn Family originating from Gia Miêu 嘉苗 Village (Thanh Hoá Province),

whose power and authority were then inherited by his descendants, and 2) the Restored Lê Dynasty emperors were powerless puppets throughout their reign from the first emperor Lê Trang Tông 黎莊宗, installed by Nguyễn Kim in 1533, until the fall of the Dynasty in 1789.

Both of these interpretations imply that the political structure of the Restored Dynasty was determined solely by the circumstances surrounding its formation, thereby creating an image of the absence of political change over 250 years. The first part of this article challenges that image by reexamining the Dynasty's official chronicle historiography including newly discovered sources, of which the author previously made philological examinations.

The analysis shows that contrary to the conventional wisdom, the Restored Lê Dynasty was formed around Trịnh Duy Tuấn 鄭惟俊 from the Trịnh 鄭 clan of Thủy Chú 水注 Village (Thanh Hoá Province), who placed Lê Trang Tông on the throne in Laos in 1533, only after which Nguyễn Kim then joined the new Court. Moreover, within the regime that was formed, Nguyễn Kim never played a central role until his rise to power coinciding with the decline of the Thủy Chú Trịnhs during the early 1540s, which brought about friction between Nguyễn Kim and the Emperor. The author shows that this antagonistic relationship was in part caused by the Emperor's plan to organize a military force independent of Nguyễn Kim's forces, thus showing that Lê Trang Tông was no "puppet" emperor.

Part two of the article turns to the topic of identifying the leading figures in the Restored Dynasty prior to 1545, by utilizing family chronicles and local documents. Since both the Thủy Chú Trịnh and the Gia Miêu Nguyễn Families comprised the military aristocracy (Khai quốc công thần 開國功臣) that had been instrumental in the foundation of the Former Lê Dynasty (前期黎朝) in 1428, it was their descendants, Trịnh Duy Tuấn and Nguyễn Kim, who formed the alliance regime of the Restored Dynasty, thus enabling the author to extend a line of political continuity between the two Courts. On the other hand, there were other descendants of the military aristocracy in the northern and north-western mountainous region, who opposed to the usurpation of the throne by the Mạc (莫朝) in 1527 and played an important role in the civil war with the Mạc. It is here that the author identifies a new phenomenon appearing in the first 100 years of Former Lê Dynasty rule, namely the huge expansion north of a network comprised of the descendants of the military aristocracy,

which had significant impact to reconstruct the political situation.

## The Religious Aspects of Moral Education in Turkey during the 1970s

UENO Manami

Although both religious and moral educations have been taught in a single compulsory curriculum entitled “Religious Culture and Morals” from elementary school to high school in the Republic of Turkey since 1982, prior to that time religion and morals were taught as two different subjects, “Religion” initiated in 1949 as an elective course and “Morals” introduced in 1974 as a compulsory subject. While the research to date has investigated the Religious Culture and Morals and Religion in order to understand the religious policies of various Turkish governments, it has neglected the Morals curriculum. Therefore, the present article takes up the question of whether Morals taught religious content, in order to better understand the politics of religion and education in the history of modern Turkey. To do so, the author analyzes the political background, content and transformation of Morals education from the viewpoint of religion and the lack thereof, by utilizing periodicals published by the Ministry of National Education, the curriculum guidelines for Morals and the 1976 edition of the Morals textbook.

As Turkey experienced frequent regime change during the 1970s, every new regime altered the Morals curriculum guidelines, especially with respect to its religious aspects, ranging from teacher qualifications to course content. While the secular regimes preferred to limit religious content, the right-wing governments led by non-secularist politicians endeavored to increase it. That is to say, for all politicians at that time the issue of including religious content in moral education was an important concern. For example, the 1976 edition of the Morals textbook, which was written under a right-wing government, placed great importance on Islam, attempting repeatedly to explain the relationship between “Turkishness” and Islam. Here the intent was to persuade secularists that religious ideas were an important part of moral education.

Although the research to date has argued that the military government formed after the coup of 1980 incorporated the ideology called “Turkish-Islamic